

ヨシ帯水産生物保護育成機能調査

山根恭道

1. 研究目的

ヨシ帯の水産生物保護育成機能については、これまでの調査で一定の知見が得られた。しかし、平成21年度よりヨシと同様の高等植物である沈水植物や藻類であるシオグサが大量に繁茂し、それがシジミなどに与える影響が懸念された。そこで、平成22年度は沈水植物の繁茂状況を調査し、その機能について天然ヨシ帯と比較して調査した。また、藻類の分布状況についても調査をおこなった。

2. 研究方法

調査時期は沈水植物が繁茂する春～秋期、宍道湖周辺の繁茂状況と沈水植物に蝟集する魚類を調査した。5月に宍道湖周辺36地点を調査し、それ以降は沈水植物の群落を確認された6地点（番号：4・6・11・21・29・33）とヨシ帯1地点（番号：24）の7地点で調査した。（図1）

調査方法は沈水植物の繁茂状況を目視観察し、その一部を採取して持ち帰り種類を確認した。ヨシ帯と沈水植物に蝟集する魚類は、群落周辺を引き網で10mの距離を引き回すことによって採捕した。

シオクサの繁茂状況についても宍道湖内36地点において同時に調査した。

調査方法は水深2m以浅では目視と熊手による採集で多寡を確認するとともにサンプルを採捕した。

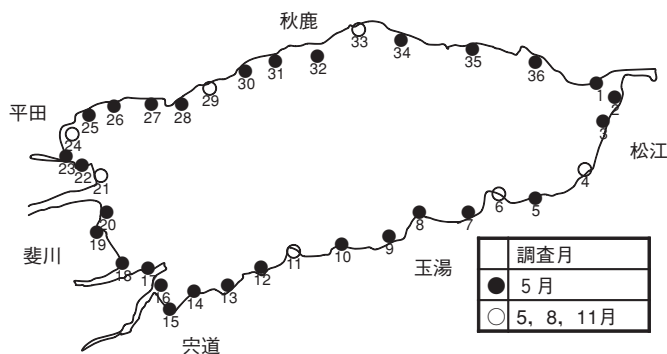


図1 沈水植物繁茂状況調査地点

水深2m～4mは熊手と小型のイカリによる採集で多寡の確認とサンプルの採集をおこなった。

3. 研究結果

(1) 沈水植物の繁茂状況

春から夏にかけてホザキノフサモ、夏から秋にかけてオオササエビモの群落を確認された。オオササエビモの群落は南岸のほぼ全域で確認され、ホザキノフサモは宍道湖全域で確認された。特に玉湯と来待では直径2m程度のオオササエビモ群落が広範囲に幾つも確認された。また、初夏には湖内全域でホザキノフサモが大量に岸边に打ち上げられていた。8月以降はアオコの大量発生により、水面下の沈水植物の確認や繁茂量の調査が実施できなかった。

(2) 沈水植物に蝟集する生物

天然のヨシ帯では確認されなかったフナやシマイサキ、クルマサヨリの稚魚が確認され、天然のヨシ帯よりも採捕魚類の種類が多かった。また、5月の調査では沈水植物にフナの卵が生み付けられていることが確認された。

(3) シオクサの繁茂状況

水深2m以浅のシオクサは宍道湖の北岸（秋鹿～平田）と南岸（富志名・鳥が先・来待）の広い範囲で大量に繁茂していることが確認された。水深2m以深のシオクサは大野地域と松江および玉湯地域で多く確認された。特に松江地区では水深3～4mで大量に確認された。

シオクサは湖底を覆うように繁茂するため、シオクサの下になったシジミは、極端に水の交換が悪くなり、水質の悪化による斃死が発生する。また、シオクサが枯れて硫化水素が発生し、周りの生物にも悪い影響を与えるので、今後はシオクサの繁茂状況とその影響について調査が必要である。